
屋上にて。

月潟隼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
屋上にて。

【Nコード】
N0788BA

【作者名】
月潟隼

【あらすじ】
意味の無い、よくわからない、でも、何か伝えたい。

月明かりと地上の光が照らす高層ビルの屋上に、十五歳程の少年が二人立っている。一人は普通に、もう一人は自身の胸程の高さのフェンスの上に。

「こんな世界、みーんな壊れちゃえばいいのに。そう思わない？ 悠」

「はるかはまだ死にたくない。だからみんな壊れるのは嫌だ」

「じゃあ、僕が死ねばいいか。そうすれば僕から見た世界は壊れるもの」

「それも困る。はるかは洸がいないと生きていけない」

「じゃあ、どうすれば僕たちはシアワセになれるのかな……」

そう言つて、洸は悠の方に向かってフェンスから飛び降りた。

「洸、見つけて。はるかと洸がシアワセになる事」

「……その方法が見付からないからこんなところにいるんだよ悠」
「んー？ はるか、よくわからない」

「そうだよな。じゃあ悠、行こうか。僕たちに優しくない街に。」

「うん。はるか、洸の行くところについていく」

「そっか。悠はいい子だね。じゃあいい子の悠には、悠の好きなたこ焼き、買つてあげようか。」

「はるか、たこ焼き好き。」

「そうだよな。所で悠、600円が二割引でそれプラス430円が三割引、それと300円でいくらい？」

「549円。ってことは、駅前なたこ焼き屋さんのネギたこと、お好み焼きたい焼きとジューズ二個だね？」

「良くできました。悠は本当にいい子だな」

「うん。はるか、いい子。」

そう言いながら、二人は街に融けるように歩き出した。

(後書き)

文章書くことのリハビリで一本。

家出少年と、サヴァン症候群で鼻つまみ者の少年のお話です。

こういう意味の無い文が一番書きやすい。

ってか新年早々、ぶっ飛ばした感が拭えない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0788ba/>

屋上にて。

2012年1月1日21時45分発行